

観光地・ケアンズに学ぶ ー海外視察研修を実施ー

11月9日から12日にかけて、毎年恒例の海外視察研修をオーストラリア北東部に位置するケアンズで開催し、11名が訪れました。研修の目的は、観光経済が大きく変化する中で、観光地としてのケアンズにどのような変化が起きているのか、また今後どのように発展・継続していくかの調査研究です。

商売には「肝・要」がありませんが、観光業において第一に挙げられるのは観光資源です。どれほど豊かな森・山・海・動物があっても規制によって人が入れないようでは観光資源とはなりません。まず規制を緩和し観光地化する必要があります。第二にアクセスです。観光資源が分散していると移動ばかりで効率が悪くなり、観光地としての魅力が低下します。海外旅行においては飛行機の直行便がなければ、そもそも訪問先とし



11名での集合写真

て選ばれにくくなります。最後に接客です。英語を話せない外国人でも、宿泊施設やカフェ・レストラン、現地ツアーを簡単に利用できる環境が重要です。

調査結果ですが、日本からケアンズまでは直行便があり約7時間、ホテルも空港から15分と、アクセスは非常に良好でした。宿泊先は観光資源を集中して楽しめる立地にある五つ星のシャングリ・ラ ホテルに連泊しました。

街並みと規模は、神戸駅からハーバリランド周辺に似た印象を受けました。ここを出発点として熱帯雨林を長距離ロープウェイや水陸両用車で探検、海ではグレートバリアリーフに浮かぶグリーン島でマリンスポーツや観光を体験しました。さらに港町ではカフェ・レストラン、ショッピングやカジノと観光資源を調査するた



グラスボート



夕食のシュラスコ

めに全て体験しました。接客面では、ほぼすべての観光地レストランに日本人が働いており、英語は不要でもおてもなしも最高です。現地観光予約もJTB社があり、好きにアレンジしてもらえました。

また、大橋巨泉氏が経営していたOKギフトショップでは、かつて中国人が急増した際に政治的・民度的リスクから混乱が生じた反省から、日本人客に「選択と集中」を行ったという話を伺いました。海外からの観光客は日本人が最も多く、20年前には年間25万人もの来訪があったものの、リーマンショックや震災の影響で6万人まで減少し、コロナ渦でほぼ0にまでなりました。今ではようやく10万人まで回復したものの、伸び悩んでいるとのこと。今後さらに増加させるためには、飛行機の直行便数増加とワーキングホリデーの日本人にたくさん来て欲しいとのこと。時給3000円以上だそうで、いかがですか。

(エイム研究所 矢野 弘)



ケアンズ観光の変化を聞く